5 女医宇良田唯子

宇良田唯子が日本女性として最初のドイツ留学を終え、ドクトル・メジチーネの学位を得て天草へ帰ってきたのは、明治三十九（一九〇六）年のことであった。その後、彼女は小さい時からの夢であった故郷牛深で開業することができ、眼病に悩む人たちの医療に一心に尽くしていた。

しかし、彼女の優れた才能を惜しむ人々は、彼女を長く故郷にとどめておかなかった。中でも、女子学習院からの誘いは熱心で

「若い人たちの衛生思想を育てるため、是非東京に出てきて力を貸してほしい。」

と頼んできた。彼女は数日の間、考え抜いた後、ついに上京することになったのである。

だが、女子学習院で教師として仕事を続けるうちに、彼女は患者を救うことが自分の使命ではないか、という思いに悩み苦しむようになった。そこで、夫である薬剤師の中村常三郎とともに、北里柴三郎を訪ねた。柴三郎は郷里の先輩であり、医学上の恩師でもあった。

「君たちは、中国に行ってみる気はないかね。今、中国では専門の医師が少なくて、たくさんの患者が救いの手を待っているのだが。」

という恩師の言葉に、唯子はしばらく考えていたが、

「私たちに、そんな大役が務まるでしょうか。」

と尋ねると、

「大丈夫、君たちならきっとすばらしい成果をあげることができる。」

柴三郎は自信を持ってきっぱりと答えた。そして、中国の様子についていろいろと話してくれた。

「先生、行ってみましょう。私たちの力がお役に立つなら。」

こうして二人は中国へと旅立っていった。天津へ着いた明治四十五（一九一二）年、早速ここで「同仁病院」を開いたのである。

当時、天津には諸外国から来ている人が多く、病院を訪れる患者は様々であった。そんな患者に対して、唯子は中国人には中国語で、ドイツ人にはドイツ語で、英米人には英語で応対した。通訳なしの会話は患者と彼女の心をぴったりと通い合わせることができた。また唯子は患者であればだれでも気軽に診療し、時には一日がかりの往診も行った。こんな相手の心を大切にする唯子の態度はだれに対しても同じだった。

唯子のところに産婦人科学の個人教授を受けにくる中国人医師の娘さんがいた。ある日、机をはさんで講義を聞きながら、ハンカチを口にあててうつむいているので、

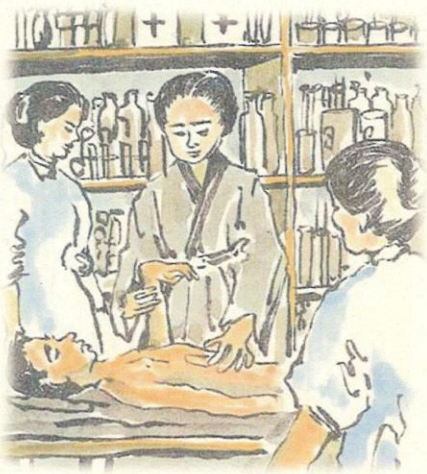
「どうしたの。」

と聞くと、

「ニンニクを食べた後で、においがしますから。」

と答える。唯子は、

「中国の人と仲よくするため私はここにやって来ているのよ。これから私の方が中国流を学んでニンニクを食べなければなりませんね。」



と笑いながら言った。

また、彼女が往診を頼まれて、中国人の家に行った時のことである。家族の者が患者にかけているふとんをはごうとしていた。治療費を払うため、お金に換えるつもりらしい。唯子は、

「お金のことなら心配いりません。そんなことをして、病気がひどくなったらどうしますか。」

と、それを止めた。そして、

「先生、そこまでしなくても。」

という看護師の言葉をさえぎりながら、そっと患者のふとんの下にお金を置いてくるのだった。

このように貧しい患者に対しては治療費を取らないだけでなく、時にはお金まで与えて治療するので、患者が多い割には、自分たちの生活は楽ではなかった。夏にはあわせをひとえに縫いかえ、食事も質素にして、万事切り詰めた生活であった。

数年後、国際政治の関係から、外国人の一人歩きは大変危険となったが、彼女は平気で往診に出かけた。いちずに患者のために働く彼女の姿に心を打たれ、だれ一人として危害を加える者はなかった。

ところで、こんな彼女も一度だけ、自分が医者であることを後悔したことがあった。それは、昭和八（一九三三）年、夫である常三郎を病気で亡くした時のことである。患者の診療に忙しく、病気で寝ている夫にいつも付き添って看病することができず、そのため病気の急変に気づくのが遅れ、夫はとうとう帰らぬ人となってしまった。

「あの時ほど、医師になったことを後悔し、苦しんだことはありません。一時はこの仕事を辞めようかと思いました。」

と後で、彼女は知人にもらしたことがある。

しかし、その後、

「やはり、私は患者のために生まれてきたのですね。」

と言いながら、前にも増して医療活動に没頭した。戦争の激化により、天津の病院を閉じるまでの二十年間と、帰国後昭和十一（一九三六）年に六十四歳で亡くなるまで、宇良田唯子の一生は女医としてひたすら人のために生きた生涯であった。

宇良田唯子が眼科の医者になったのは、生まれ育った牛深（現在の天草市）地方に眼病にかかる人が多かったからである。当時、女性が医者を目指すことは大変珍しかった。同じ熊本出身の北里柴三郎の研究所で勉強にはげんで医者の資格を取り、明治三十六（一九〇三）年に三十一歳でドイツに留学する。熊本に帰って来た時は、牛深中の人たちが大歓迎したと言われている。中国では貧しい人のために治療し、「女神さま」と呼ばれた。帰国後、東京で病院を開いた時も、貧しい人からは治療代を受け取ることはなかったそうだ。